

# 最期はどこで

ついのすみか探して

終末期の延命治療をどうするか。認知症や意識障害などで本人の希望が分からず、家族が判断を求められることがある。

「命の選択といつか、重い決断でした」。認知症の母をみつめた長男(62)＝松山市＝が静かな口調で話し始める。

93歳の母は介護施設で5年間暮らし、昨年5月、息を引き取った。「十分長生きしてくれた。苦しい思いをさせたくない」と、過剰な延命措置は控えた。

「胃ろうをしたら元気になるか、母に聞いたことは一度

「苦しいもんなんでしょか？」

「胃ろうをしたら元気になるか、母に聞いたことは一度

## 第5部 リビングウイル ②

もない。無意識に避けていたのかもしれない。「精神的にきつかったです。元気な時に意思確認していれば、違ったかもしれません」

県内の一部病院では、患者本人が判断できるうちにリビングウイル(事前指示書)を作ってもらおうと、医療スタッフがサポートする動きも出ている。

愛媛大医学部付属病院(東温市)の薬物療法・神経内科は2011年から、患者の一部に終末期医療の希望調査票を配布している。

終末期医療の希望について医師と話し合う志磨高さん(中央)と起代子さん(7月、愛媛大医学部)



# 元気なうち大切な人と

野元正弘教授(62)は「本人の意思が分からないため、終末期の治療方針について医療スタッフや家族が判断に困り、苦悩する場面がたびたびあった」と説明し、患者の自己決定権を尊重するインフォームドコン

セント(十分な説明と同意)とも位置付ける。調査票は選択式で、心臓マッサージなどの心肺蘇生▽延命のための人工呼吸器▽鼻チューブによる栄養補給など8項目。担当医と看護師が確認し、カルテに

保管することで、スタッフ全員が情報を共有する。これまで約30人が提出した。終末期という言葉に当初戸惑う本人や家族は少な

「2月、誤嚥(ごえん)性肺炎の再発で一時的入院した。昨年5月に入院した時も担当医から尋ねられたが、その時は返事を濁し、やり過ごしていた。15年ほど前、手足のまひ

「まだまだ元気なのに終末期医療の希望なんて。帰りがあれば問題ない。食事は一人でできる。」

大切な人と考えるきっかけにしてほしい」と期待する。

志磨高さん(79)＝松山市

## いつでも修正可能 原則

終末期にどんな医療を受けたいのか、受けたくないのか。いろんな選択があつていい。調査票にも明記されて(2013年)では、愛媛大病院が参考に約4割が「家族と話し合ったことがある」と回答。社会の高齢化に伴い、みどり方やみどり方への関心が高まっていることがうかがえる。

リビングウイル(事前指示書)を作成した後、病状や環境の変化などで本人の意思が変わることもある。リビングウイルの大原則は「いつでも修正・撤回できる」。

愛媛大病院が参考にしたのは、全国に先駆け07年に導入した国立長寿医療研究センター(愛知県)の取り組み。同センター在宅連携医療部は「終末期医療の混乱の要因の一つが、本人の意思が確認できていないこと。取り組みの延長線上には、患者の意思を尊重した高齢者医療・ケアの実践がある」としている。

2. 終末期になった時の希望 (希望の項目をチェック(✓)してください)

①心臓マッサージなどの心肺蘇生	<input type="checkbox"/> して欲しい	<input type="checkbox"/> して欲しくない
②延命のための人工呼吸器	<input type="checkbox"/> つけて欲しい	<input type="checkbox"/> つけて欲しくない
③抗生物質の強力な使用	<input type="checkbox"/> 使って欲しい	<input type="checkbox"/> 使って欲しくない
④胃ろうによる栄養補給	<input type="checkbox"/> して欲しい	<input type="checkbox"/> して欲しくない
「胃ろうによる栄養補給」とは、流動食を腹部から胃に直接通したチューブで送り込むことです		
⑤鼻チューブによる栄養補給	<input type="checkbox"/> して欲しい	<input type="checkbox"/> して欲しくない
⑥点滴による水分の補給	<input type="checkbox"/> して欲しい	<input type="checkbox"/> して欲しくない
⑦その他の希望(自由にご記載ください)		